オオタカ

Accipiter gentilis

タカ科・留鳥

オオタカ。円内は若鳥

名前の由来
タカは高く飛ぶからという説、猛き（たけき）鳥という意味からという説などがある。オオタカ＝大きい鷹。漢字名の蒼鷹は背中の青灰色に由来するのかもしれない。
漢字名：蒼鷹、大鷹

特定種

種の保存法：国内希少動植物種
国レッドリスト（2007）：準絶滅危惧（NT）
北海道レッドデータ：絶滅危急種（Vu）

形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オス50cm、メス56.5cm。翼を開いたときの端から端の長さ105～130cm。オスはカラスくらいの大きさ。強い足と鋭利な爪、頑丈で鉤型に曲がった鋭いくちばしを持つ。
成鳥の背面は暗青灰色。白く明瞭な眉斑（眉の様な模様）がある。下面は白く、黒く細い横じま模様が一面にある。尾には太く黒い横帯が４本（尾を広げると５本）ある。飛んでいるときには翼の下の面は白くて黒い横じま模様がはっきり見える。
また、飛んでいるときは翼の後縁にふくらみがあり、尾が長く見える。
幼鳥は背面が褐色、下面には褐色の縦斑がある。
声：ほとんど鳴かないが、繁殖期には「キッキッキッ」と鋭く鳴き続ける。また「クァイー、クァイー」と鳴くこともあるという。
飛び方や歩き方：開けた空間を飛ぶときには、速い羽ばたきに短い滑空も交えて直線的に飛ぶ。上空で翼を水平に広げて円を描くように飛ぶこともある。
餌を捕らえるときには、入り組んだ樹間を身をひるがえしながら飛び抜け、急降下や急上昇をして獲物を捕る。

類似種と見分け方：クマタカ、ハイタカ。
オオタカは翼の後縁にふくらみがあり、尾が長く見える。
クマタカは大きく、羽ばたきも遅い。
ハイタカはハト程度の大きさで羽ばたきも速い。

オオタカ。白い腹に横スジあり（この写真では見づらい）

オオタカの幼鳥。腹に褐色の縦スジが入る

ハイタカの腹（左）と背（右）。大きさはハト大と小さい

生息環境・分布

針広混交林（針葉樹と広葉樹の混ざった林）を好むが、農耕地の孤立林、防風林などにも生息する。営巣地は高木層と低木層の間に一定の空間を持つ樹齢40年以上の林が好まれるともいう。
分布：北アフリカおよびユーラシア大陸と北アメリカ大陸の温帯・亜寒帯南部で繁殖し寒地のものは南下、越冬する。
日本では、四国の一部および本州、北海道の広い範囲で繁殖する。西日本に比べ東日本の方が繁殖記録が多い。
北海道では留鳥で、平地～亜高山帯に通年生息する。
十勝では留鳥で、平地～低山帯に生息する。平地の防風林や段丘林、孤立林などでも繁殖している。冬になると数が減るので一部は本州以南で越冬していると考えられている。

生活サイクル

	１月	２月	３月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月
十勝出現期												
				繁　殖							一部南下	

食性・他生物との関わり

主に小～中型の（ツグミくらいの）鳥類。ハト、カモ、シギなどの中～大型の鳥類や、ネズミ類、リス、ウサギなども捕食する。
入り組んだ樹間を身をひるがえしてくぐり抜け、まっすぐに急降下や急上昇したりして獲物の背後から襲うという。
ヒナにはハトやカケス、リスなどを与えるという。
捕食者であり、食物連鎖の頂点にたつ種のひとつ。成長してしまえば他の生物に襲われることはあまりない。

繁殖生態

営巣期は２～７月、一夫一妻で繁殖。早いもので２月からディスプレー（誇示のための行動・動作）・巣作りが始まり、産卵期は４～６月。７月巣立ち。（→興味深い話の項参照）
広い行動圏を持つが巣が一定間隔に分布することから、つがいでなわばりを持つと考えられているようだ。
高木の太い枝の付け根に木の枝を積み重ねて皿形の巣を作る。巣作りはオスメス共同で行う。
２～４個卵を産む。夜はすべてメスが卵を抱き、昼もほとんどメスが抱くという。
36～41日でヒナがかえり、ふ化したヒナは全身白い幼綿羽に覆われているという。初期にはオスが獲物を足でつかんで飛んできて、それをメスが引きちぎってヒナに与えるが、ヒナが育つと、オスメスともに餌を取りに出るという。（→興味深い話の項参照）
約40日でヒナは巣立つ。
１歳で繁殖するものもいるが、多くは２～３歳で繁殖する。

興味深い話

■かなり人間の生活圏に近いところにも生息しており、「里山」の鳥だともいわれる。
■繁殖の最中に道が近くにできたりすると、かなり神経質になり、観察者が背を向けたとたんに急降下しながら鋭い声を上げ、襲ってきたりもするという。
■ワシタカ一般に求愛ディスプレー（誇示のための行動・動作）では、空中で急降下や急上昇を行ったりするという。
■ヒナは一度にふ化するのではなく、10日ほどかけてだんだんとふ化し、早くふ化したヒナが遅くふ化したヒナをつつき殺すことがあるという。
■オスは巣に餌を運ぶ際、獲物の首を落としたり羽毛をむしるなど、ある程度「料理」してからメスに渡すという。
■鷹の威を借りているのか、巣の下にスズメが住んでいたり、予備の巣をフクロウなどが利用していたりもするという。
■小鳥はタカの仲間でも襲うもの（オオタカ、ハイタカ、ハヤブサなど）か違うもの（トビなど）かをよく認識しているという。小鳥やカモなどが突然あわてて逃げるときには、近くにオオタカなど鳥を襲う猛禽が近づいているのかもしれない。
■古来より鷹狩りによく使われた種類のタカ。
■十勝地方のアイヌ語では「シチカプ」という。

配慮事項

防風林などで繁殖をしていることもあるが、むやみに近づくと繁殖に悪影響を与える可能性がある。

参考文献

「山渓カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と渓谷社 1985（1995 ２版21刷）
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995
「北海道鳥類目録改訂２版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000
「野鳥ブックス－２ フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982（1994 増補版７刷）
「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol.II」清棲幸保、講談社 1978
「北海道のクマタカとオオタカ」藤巻裕蔵 編集、北海道猛禽類研究会、1999
「図鑑 日本のワシタカ類」森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男、文一総合出版 1995
「日本動物大百科 第３巻 鳥類Ⅰ」日高敏隆監修、平凡社 1996
「動物名の由来」中村浩、東京書籍 1981
「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ 編著、主婦と生活社 1997
「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993
「山川弘氏からの聞き取り記録」内田祐一（未発表）

遠藤孝一・若杉集・高松健比古・中山正匡（1987）那須野が原におけるオオタカの繁殖生態．日本鳥学会1987年度大会講演要旨．日鳥学誌、36：111.
遠藤孝一・中山岳彦・飯沼覚寿・トーマス＝ミラー（1987）那須野が原におけるオオタカの繁殖期の生息状況と営巣環境．日本鳥学会1987年度大会講演要旨．日鳥学誌、36：111.
遠藤孝一・飯沼覚寿・菊池知義・中山正匡・高松健比古（1984）栃木県西那須野町におけるオオタカの繁殖生態と生息地の現状．特殊鳥類調査報告、pp. 47-57．環境庁．
鈴木伸（1990）オオタカ *Accipiter gentilis* の巣における兄弟殺しの観察．Strix, 9 ： 230-231.